

岡崎久彦著「陸奥宗光 上」PHP文庫 1990年11月15日刊を読む

陸奥の思想的背景は、徂来学(そらいがく)と功利主義であって、「天賦人權」というような自然権の発想ではない。

要は国益であり、経世済民(けいせいさいみん)である。

よい政治、政策が第一で、そのための手段、—— どのような政治体制をとるかも手段の一つである —— は一次的な意義しかない。

徒党を組んで騒ぐのも別に反対ではないが、「それが、どういうお国の利益になるの?」「どういう民の幸福になるの?」と絶えず問い返す人である。

陸奥個人にとっては、大事なものは、国利、民福のために自らの経綸をいかに実行するかであって、そのために権力を得る手段もまた、何でもよいわけである。そして、出獄後の陸奥は、権力を得るためには、民間の運動によるよりも、政府内部に入る方が近道であると判断していた。

[コメント]

ベンサムの最大多数の最大幸福をよく理解した陸奥の思想は、日本の外交の上で大いに役立った。

- 2009年3月6日林明夫記 -